

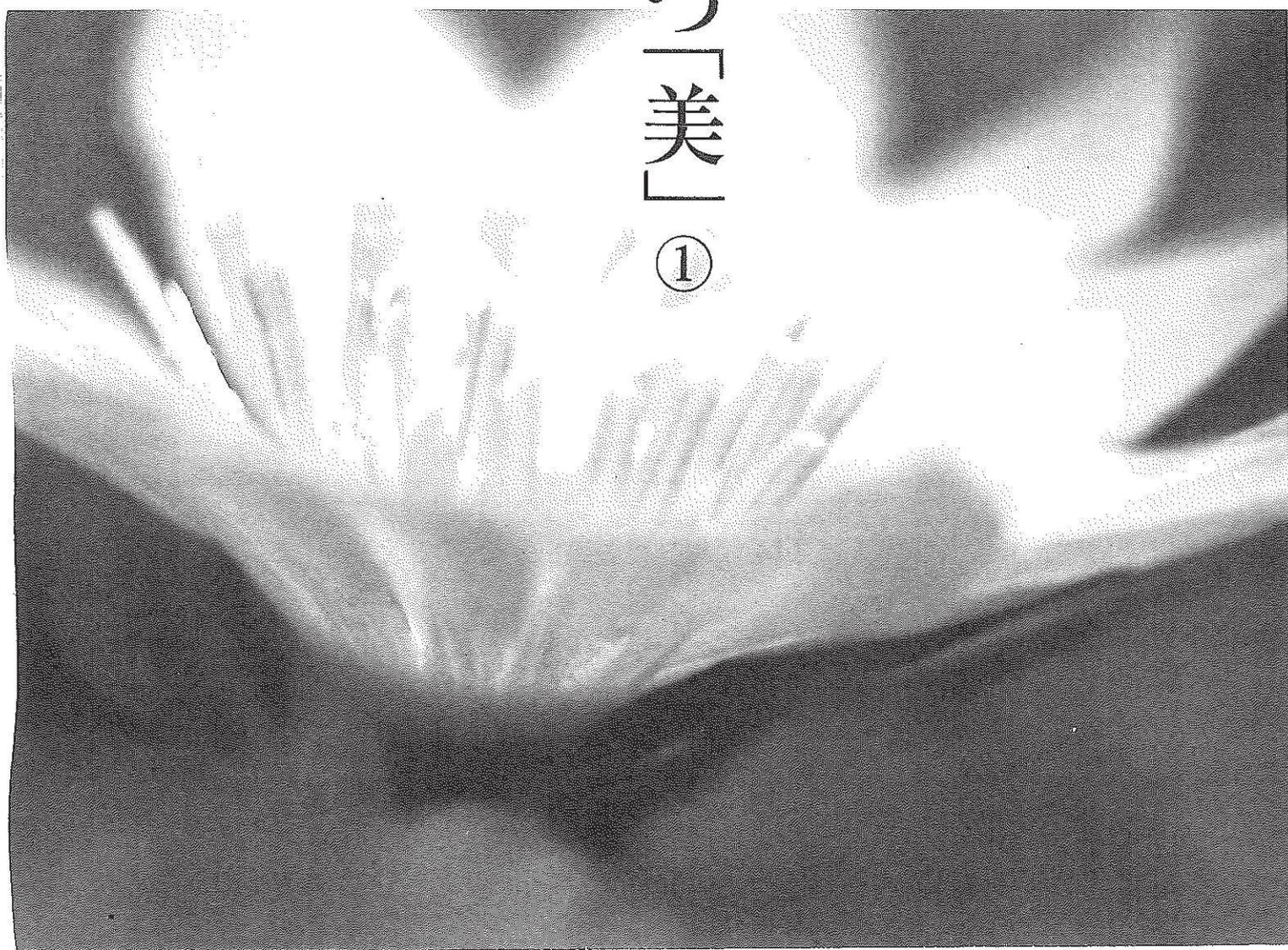
体をひらく、
心をひらく、
第六回

いい女はこうしてつくられる

耐えることによつて育つ「美」

①

●野口整体 気・自然健康保持会 指導補佐
金井とも子



子の心はいつも親の方を向いている

今の子どもは、幼児の頃より社会的成功を前提に育てられているかのようですが、昔の子どもは、小学生の頃までは「型」にはめられず、時の経つのを忘れて転げ回って遊びに興じたものです。遊びの中で、子どもは無意識のうちに、人と人が接触し、馴染んで生きる感覚を身につけていきました。

他の生き物より優れた智慧を備えた人間は、心を大きく育てながら豊かに自然界を生きて、身体感覚を高め、英知を使いこなして、命を全うするように生まれついております。人と人の通い合いも希薄になり、心に落ち着きのないことに違和感を持つことなく生きている人が増えております。今こそ自ら弾力ある「身体力」を取り戻さないとけません。

ある学校で子どもたちが小さな生き物を見つけて棒で突っついて遊んでいるうちに死なせてしまうということがあります。学校の先生は「いけません」と、ひと言注意しただけだったようです。そのような時、大人は「ここまでやれば死んでしまう」と、子どもが分かるように教え、小さな気持ちの中に、「生き物の生と死との加減」を入れてやるのが大事です。子どもとはいえ、生き物を死ぬまで突っついてしまふ、死なせるつもりで突っつくのはよくないのは当然ですが、ここまでやれば死ぬということの「加減ができる身体感覚」が育たないまま成長していくのはもつと問題です。

親は、子どもに夢を託しながら育てますが、今の親は夢をあたためて伝えることができず、むしろ、自分の好みを子に

押しつけているかのようです。自分の好みで基準をつくり、「盆栽」でも造るように子どもを型にはめ込んで育ててはいないか、親がもう一度、子に対する夢を、見つめ直して見る必要があります。

このとき、親の思いと子の思いとが一つに重なり合っているようななら、まだ良いのですが、「早く大人になれ」と言わんばかりの風潮の中で、親が自覚もなく、のびのびと育つべき子ども時代を摘み取っているのはなんとも残念なことです。そうした親の下で、感情は子どもそのまま「カッ」となる見境がつかなくなるような、大人になりきれしていない若者が多くなってきました。

道場を訪ねてくる若い人たちの悩みに向き合うたびに思うのは、人は幼い頃に心の奥にしまいこんだ影響をいかに大きく引きずっているかということです。一つひとつの心的要因を求めていくと、親が考えもなく子どもに投げた「負の言葉」が身体に染み込み、それが「潜在教育」となって子どもに影響を与えます。ところが、一度潜在意識の深いところに入ってしまったものを意志の力だけで切り替えていこうとすると、中心軸ができていない人は無意識に依存度を高めてしまふ結果となります。

親の日常の暮らしぶりや、会話は子どもにとっての「潜在教育」です。子の心は、いつも親の方を向いています。親の語るひと言ひと言が、子の人生を豊かにもすることもあれば、摘み取ってしまうこともあります。親は、感情豊かな子になるよう、情緒を持てる身体に育てることを大切にしていこうとだと思えます。

「溺愛」と「不条理な厳しさ」を繰り返す母

大手金融機関で数十億が一日で動くようなセクシオンで働くキヨミさんは、利発な子ども時代を過ごしてきたことを感じさせる一方で、その奥に、親から受けたであろう「負の気持ち」もしつかりと受け取ってきたような雰囲気漂わせていました。

道場に来た頃の彼女は無表情で、自分の結婚や将来に夢を持たず、気持ち沈ませて生きていました。三十代前半と言えば、「本当の自分」を使えてよい年頃なのに、自ら気持ちに蓋をして生きていようなどころがありました。その原因は母親にありました。

母親は一人娘のキヨミさんを、感情の赴くままに「溺愛」と「不条理な厳しさ」を繰り返して育ててきたのです。例えば幼い頃、よそで遊んでいて、嫌なことや悲しいことがあつてそれを訴えると、母親はキヨミさんにきちんと向き合うことなく、その言葉だけを捉えて感情的に、「あなたに際があったのよ、油断していたからよ」と一刀両断のごとく裁いてしまう。そうかと思えば、理由もなく「いい子ね」と可愛がられる。そのような親のアンバランスな対応の下で育てられたため、幼いながらも不納得のまま、澁澁とすることなく、そうかといって反抗もできず、内面を形成していったのです。結果彼女は、長所、短所も分からないままに親の言葉どおりが自分だと思い、身体力を抑えつけ、内攻させてしまったようでした。母親の「情」が「情念」になってしまうと、子は束縛されているように感じ、自ら動けなくなるものです。

子どものうちは、良いか悪いかは分かってても、その意味まではなかなかわかりません。幼い頃から、「ダメ」「いい子」といった言葉だけが意識に植え付けられ、やがて無意識に入っていくと、「身体への勘」をなくし、「嫌」も「良い」もはっきりできない、勘の鈍い人間になってしまいます。すると、意識だけが頼りとなり、何か事が起きると、「行き詰まり感と不安感」でいっぱいになり、その心が身体から離れなくなるのです。ここに彼女の無表情の原因がありました。

幼い子どもでも、自分のことを分かっているという気持ちは、身体への要求として自然に備わっています。だから、母親はどんなに小さなことでも慈愛の心できちんと受け止めてあげてほしい。そうすることで、気持ちの安定した子どもに育ち、社会に出て辛いことがあっても、心が荒むことなく自分で解決していける心の器ができていくのです。

人間は、縁によって人と関わりながら人生を送っております。その人が荒れていけば荒れた縁、細やかであれば細やかな縁を引きつけます。縁というものも身体に内在されている力です。その「気」が、縁を結びつけて生かしていくのです。

身体の内にあつた古い大きな傷

キヨミさんは、母親の言葉に混乱し、黙るより仕方ない雰囲気の中で耐えていたのですが、耐える中から、彼女にはある種の雰囲気が出ていきました。

野口整体の創始者・野口晴哉先生は、「耐えることによつて育つ『美』というものがある」と言われていましたが、彼

女の裡にもその美があるように思えたのです。

彼女はまだ自分に内在する裡の要求に気づいてはいないものの、整体との関わりを通して身体に勢いが出はじめたとき、家を出て一人暮らしを始めました。

このような母親から精神的に自立するのは大変なことですが、彼女の身体の奥には、裡からの要求を行動に移す割り切りの良さが備わっていました。この割り切りと彼女の持ち前の責任感が一つに使えるようになると、他に依存することなく、自分自身を生かしていくことができます。

この頃の彼女は、身体の状態から、まだ気持ちを晴れやかに生きていないことが感じられました。何十億単位のお金を動かす仕事に就いていることについても否定的に捉え、自分が金銭を得ることを、自らが汚れていくかのように話をするのです。それは、父親が知人の借金の肩代わりをしたとき、それを毎日のようになじり、責めていた母親の姿に、キヨミさんは子どもながらも嫌悪感を抱き、「お金儲けは汚いもの」と無意識に入れてしまっていたからです。

まとまった休日が取れると海外旅行に行く彼女でしたが、私は、「彼女は自分自身に不納得な気持ちさせつせと捨てに行っているのだな」と理解していました。自分自身に不納得の彼女は、男性との付き合いにおいても、自分の気持ちをほつきりさせないまま接触を続けていました。子どもは、友達や大人との肌と肌の触れ合いを通して、接触の感覚を身につけ、人間関係を築いていきますが、それが乏しかった彼女には付き合いたいというこの意味さえ分からなかったのです。

そんな彼女も、背骨や腰の感覚を通して身体性を高めてい

くうちに、少しずつ自分を捉えられるようになり、心の成長が見えてきました。そして、内なる身体が整ってきたと思われたところに、身体の奥に錆付いていた古い大きな傷が出てまいりました。

人は傷が深いほどに、心の闇も無意識の深いところに落とし込まれてゆきます。身体の奥にこのように闇を持っていると、生命力を強く澆刺と使えません。

彼女が仕事の関係で、ある地方都市に行くと、決まって気分が悪くなり、しばらく沈み込むという状態が出てきました。記憶を辿っていくと、子どもの頃に経験した心的要因がはっきり現れました。子どもだったこともあり、意識ではすっかり忘れていたのですが、身体の奥に潜伏し、彼女自身が、自分の生き方に「何を想念して暮らしてよいか分からない」という状態を無意識につくりあげていたのでした。

彼女は今、その心的要因を見つめることによって少女時代の苦しみから解放され、自らに備わった感覚を呼び起こし、裡なる要求に素直に耳を傾けて、自立を果たそうとしています。次号では、キヨミさんが、長年身体の奥に秘めていたトラウマとどう向き合い、苦しみの中から本当の自分を探し、自ら立っていくことを要求しはじめたのかを紹介したいと思います。



金井とも子 かない・ともこ

一九三九年(昭和十四)生。野口整体気・自然健康保持会指導補佐。七五年活元コンサルト取得。九一年より整体指導補佐として整体指導を求めて道場に訪れる人たちの相談役を務める。現在は活元指導の会も行っている。

ホームページ <http://www.ne.jp/asahi/ki/shizenki/>